おばあさんはゐなくなつてしまふんですもの、さつきの、あつたかいストーブの火や、あたたかい料理や、あの大きな、きらきら光るクリスマスの樅の木と同じやうに、おばあさんも、パッと消えてしまふんですもの。」

そして、まづしいかはいさうな少女は、なつかしいおばあさんを、いつまでもそこにゐさせようと思つて、マッチをどんどん燃やしつけました。さうして、たうとう、持つてゐた一束のマッチを、みんな、燃してしまひました。マッチは、あかあかと燃えて、あたりはまつ晝間よりもずつと明るくなりました。

おばあさんは、これまで、こんなに大きくうつくしく見えたことはありませんでした。おばあさんは、まづしい少女を腕の中にだきかかへて、頬ずりをしました。そして、二人は、にこにこ喜びながら、地の上をはなれて、高い高い大空の上の、寒さも、ひもじさも、苦しさもないところへとんでいきました。二人とも天國へいつたのでした。

けれども、さつきの家の隅には、あのまづしい、あはれな少女が、くれの三十一日の晩に死んでゐました。赤い頬と、ほほゑんだ口もとをのこしたなきがらが、壁によりかかつてかじかんで

こごえてゐました。

やがて、その小さな死顔の上に、元日の朝日がさしました。少女は、一束のマッチの燃えのこりを、すつかりもつたまま、こちこちになつて、朝日に向いて、坐つてゐました。

「ああして身體をあつためようと思つたんだね。」

そこへ集つて來た人たちが言ひました。

けれども、このまづしい少女が、どんな美しいものを見、そして、やさしいおばあさんといつしよに、どんなに光り輝く天國へ、お正月をむかへに、この世をとび去つていつたかを、たれも氣がつきませんでした。

新桃太郎の話

おぢいさんと、おばあさんとがゐました。

「わしは山へ柴を刈りにいくから、おばあさんは川へ、おせんたくにおいき、そしてね、もういち度、桃をひらつておいで」

ある日、おぢいさんはさう言つて、山へ、どつこい、どつこい、登つていきました。

おばあさんは、そのあとから、川へおせんたくに出かけました。さうして、ヂャブ、ヂャブ、よごれた着物や、じばんなどを洗つてゐました。

「桃よ、來い、來い、流れて來い。大きい桃よ流れて來い」と、おばあさんは、小さいこゑで、かう唄ひながら、ヂャブ、ヂャブ、やつてました。

すると、川上から、黒いまるいものが、浮んだり、沈んだり、流れて來ました。

「ほい、ほい」おばあさんは、うれしさうにこゑをたてました。けれども、形が小さいので、が

つかりしてしまひました。

「何だらうな、へんなものだ。」

おばあさんは、ふしぎに思ひました。が、それはイガのままの栗でした。そこで、栗を桃の代りに、お家へ持つてかへりました。

「桃は？」おぢいさんが、夜になつて聞きました。

「今日は、桃の代りに、栗を拾つて來ましたよ。」

おばあさんはニコニコ笑ひ笑ひ、栗の實を掌にのせて見せました。でも、おぢいさんは、ちつともうれしい顏をしませんでした。

「おばあさん、わしはね、栗なんか欲しくない、わしは、もうひとりの桃太郎が欲しかつたよ。さうすると、また、わしたちはきび團子をこしらへることが出來たり、勇ましい鬼退治にいくのを見送つたり出來たのだ。」

おぢいさんはかなしい顏をしました。

「まあ、おぢいさん、おぢいさんはまるで夢を見てゐるわね、そんなことは、もう遠い遠い、昔

話になつたんぢやありませんか。」

と、おばあさんは、をかしいといふ風に笑ひました。

「いやいや、わしは夢を見てゐるんぢやあないよ。」

「だつて、それに、今の世の中に、鬼なんて言ふものはゐませんよ。」

「おばあさんはバカだよ。今の世の中には、鬼がうようよしてゐるんだぞ。正直に働いてゐる人間に、さも深切さうに言ひよつて來て、逃げられないやうに鎖で縛つてから、生血を吸つてゐるのだ。」

「へえ——」と、おばあさんはびつくりしました。

「わしは、その鬼を退治るために、もうひとりの桃太郎が欲しかつたんだよ。」

おぢいさんは、殘念さうに、溜息を吐きました。目がしらには涙がたまつて光つてゐました。

望みが叶つたころには

一、

貧乏な暮しをしてゐる家がありました。子供が六人もあつて、いくら働いても働いてもちつとも樂になりませんでした。お父さんは毎日、朝は納豆を賣りに、晝は子供のお菓子を、夕ぐれには豆腐を賣りにいきました。お母さんは赤ん坊を背中に結びつけるやうに背負つてから、よその家のお洗濯をしてすこしばかりのお金を儲けてゐました。そんなにして一所けんめいに働いても貧乏ばかりしてゐました。

子供たちは、お父さんがさうしてお菓子を賣りに行くのに、自分たちはひとつだつてもらふことができませんでした。

「あたい、お菓子が食べたいわ。」と、妹の子がいひました。

「あたいも欲しい、ひとつだつていい。」と、弟の子もいひました。

「お前たちお錢をもつてるかい？」と、兄の子がふたりの兄弟にききました。
「お錢なんかないや。」
「あたいだつて……。」
ふたりの兄弟は、びつくりしたやうな顏つきで、さう答へながら兄を見あげました。
「そんなら駄目だ。お父さんはお菓子屋さんだから、ただではくれないんだぜ。」
「さうかなあ。」と、弟の子は頭を傾けました。
「さうだとも、みんなお菓子屋さんのお父さんから、買つて食べるんだよ。」
「そんならよその子供たちは、お錢をもつてゐるの、ダ？」妹の子がききました。
「ああ。」
「どうしてもつてゐるの、あたいたちはもつてゐないのに。」
「お父さんや、お母さんにもらふんだよ。」
「いいわね、あたいなんかもらはないわ、なぜ、その子たちはもらふんでせう。」
「そこのお家がお金もちだからね。」

大きい三人の子供たちはそんなことを話しました。またお父さんや、お母さんも、夜、暗い電燈の下でこんな話をしました。
「けさ、納豆はどれだけ賣れました。」
「一圓二十五錢賣れたよ。」
「お菓子は？」
「四十二錢。」
「晩のお豆腐は？」
「一圓九十二錢。」
「みんなで三圓五十九錢、利益が一圓四十錢、わたしはお洗濯をして三十錢もらひましたから、子供にお小遣ひをやりませうね。」
「うん、毎日やりたいなあ。」
「ええ、こんなに働いても、貧乏ばかりしますね。」
と、お母さんは目に涙を浮べて、ほつと溜息を吐きました。

「仕様がないさ、家には貧乏神がくつついてゐるからな。」
お父さんは、さういつて、細細と笑ひました。

二、

雨が降つたり、雪が降つたりしますと、お父さんやお母さんの仕事は出來なくなります。幾日も幾日も商賣に出られない日がつづくこともあります。そんな日にはお洗濯が出來ませんし、お菓子を賣りに出かけても、子供たちは、たれひとり外にゐません。

「坊ちやん、今日は雨が降つて道か悪いから、お家の中でお遊びなさい。」と、女中さんにいはれてゐますし、

「今日は風がひどいから、外へ出ると、風邪をひきますよ。」と、お母さんにいはれます。

また、おばあさんはかういひます。

「坊や、今日はほんとにひどい雪が降つてゐますね、さあ、ここへ來て、おばあさんといつしよにおこたにあたりませう、そしておばあさんの子供のころのお話をしてあげませう。さあ、早くいらつしやい。」

冬になりますと、商賣はさうしてだんだんと出來なくなつて、利益もすくないので、なかなかお金もちになれさうもありません。いや、貧乏はだんだんひどくなつて來ます。お父さんやお母さんは考へました。

「冬といふ奴は、なんてまあ厭な奴だらうな。ひよつとすると貧乏神が化けて來てゐるかもしれんぞ」と。

さうして六人の子供を中において貧乏なお父さんお母さんは深い深い溜息を吐いてゐました。

ある日、洋服をきた立派な人が怒つた顔をして入つて來ましたので、子供たちはみんなびつくりしました。

「わしは役所の役人だ、お前の家はまだ税金を拂つてないでないか。早く納めなくちやいかん、アアン」といひました。

「わたしの家は見る通り貧乏で、今はお金がありません。」

と、お父さんはおそれ入つて答へました。

「税金を納めないと、そのひとは牢屋に入れるぞと王様がおふれを出してあるぞ」と役人は邪慳

さうにいひました。

「はい、それはよく知つてをります。でもお役人様、私の家は、貧乏な上に、こんなに大勢の子供がをりますので、なかなか思ふやうに出來ません。」

お父さんは悲しさうな聲で、いまにも泣き出しさうな顏つきになりました。すると、いままでいかめしい風をしてゐました役人も、急にかはいさうに思つて來て、意地惡くしてゐた顏色を消してしまひました。

「それは氣の毒なことだ。さぞ、難儀なことだらうな、でもわしは王様からお給金をもらつて、稅金をとりたてていく役人だから、王様の稅金を勝手にゆるしてやることは出來ない。なるだけ早く納めるようにしてくれ。」とやさしくいひました。

「はい、出來るだけ働いて……。」

「あ、さうさう、王様のおふれに稅金を納めないひとは牢屋に入れるといふ他に、いまひとついいことがある。」と、役人は急に思ひ出したやうにいひました。

「へえ、いいことつて、どんなおふれでございますか。」

お父さんはかがやかしさうに目をみははつてききました。

「いいおふれつてね、子供が十一人ある家には、稅金を納めなくてもいい、といふことだ。しかし、お前の家は、ええと六人だから、やつぱり駄目だなあ。」

三、

貧乏なお父さん、お母さんは、役人が歸つて行きますと、顏を見合せて思はずにつこりしました。

「いい話をきいた。子供があと五人出來ると、稅金をゆるして呉れるんだ。」

「貧乏してると、稅金さへ拂へなくなつて牢屋へつれていかれるやうで心配でなりませんが、さうなると、もうそんな心配がなくなつてしまひますね。」

「さあ、あと五人の子供をこしらへよう。」

「そんなことをいつても、思ふやうに急には出來ませんよ。」

「神様にお願ひをしてこしらへるんだよ、一所けんめいになれば、神様でもいやだとはいふまいから。」

そこで、お父さん、お母さんは神様にお願ひをしました。

「どうぞ、子供をあと五人さづけてくださいまし。」と、熱心にお願ひしました。神様はお父さんお母さんの願ひをきいて、不憫に思つたのでせう。

それから一年目にひとりの子供が生れました。

それから二年目にひとりの子供が生れました。

それから一年目にひとり生れました。

それから二年目にひとり生れました。

それから一年目にまたひとりの子供が生れました。

ちやうど七年かかつて、五人の子供が生れました。子供たちは、次々に新らしい弟や妹が生れて來るのを喜びました。家の中はたいへんにぎやかになりました。十一人の子供がいつしよに物をいひますので、家の中は騒がしいほどにぎやかで、目がまはりさうです。

お父さん、お母さんはやつぱり貧乏でありました。子供がふえるとお小遣ひに困りました。しかしひとつうれしいことが出來ました。

「さあ、これで王様のおふれどほりになつたぞ」とお父さんは喜びました。

「やつと十一人になりました」と、お母さんも嬉しさうにいひました。

あの頃幼かつた子供も、やつと學校へいくやうになりました。お父さんはやつぱり壹はお菓子を賣りにいきましたが、子供たちはひとつだつて貰へませんでした。

「あたい、お菓子が食べたいや」と、小さい子供がいひました。

「あたいも」次の小さい子供もいひました。

「お錢をもつてるかい？」と、その兄が聞きました。

「お錢？　もつてないや」

「あたいだつて……」

「そんなら駄目だ、お父さんはお菓子屋さんだからな、ただではお菓子はくれないんだ。」

「さうかなあ、よその子供はなぜお金をもつてるの。」

「お父さんやお母さんにもらふのよ。」

「あたいたちにはくれないね。」

「お家は貧乏だから。」
「つまらないなあ。」
「いいさ、學校の先生は出世したひとはみんな子供のときにお家が貧乏だつたつて、いまの大將や大臣や實業家はみんなもと貧乏だつたつて……。」
「實業家つてなあに？」
「お金もちのことさ。」
「いいなあ。」
「いいなあ。」
子供たちは手をさしあげて、大きい聲で叫びました。赤ん坊がその聲にびつくりして目をさまして泣きました。

四、

ある日、七年前の役人が來ました。
「お前の家は、また稅金をまだ納めないぞ。さうたびたび狡いことをしてはいかん、アアン。」と

お父さんに嚙みつきさうな顏つきをしていひました。
「どういたしまして、決してそんな狡い心はありません。」とお父さんはお辭儀をしました。
「そんなら、なぜ、早く納めないのだ。王樣は稅金を納めないひとを……。」
「いえ、王樣はも一つのおふれで、十一人の子供のあるひとには稅金を許すといつてをります。」
「うん、さうだ。お前の家には十一人の子供がゐるのか。」
「はい。」
「それでお前は稅金を納めなくてもいいといふが、しかし、それはお前の考へちがひだぞ。お前の長男は二十一だ、二十一といへば立派な一人前の人間だ。すると、お前の家では十九を頭に十人の子供になるわけで、十一人にひとり缺けるわけだ。さあ、早く稅金を役所に納めろ。」
お父さんはしばらく物もいへませんでした。お母さんはあまりの當はづれで泣いてしまひました。お父さんは泣いてゐるお母さんの脊中をさすりながら、
「泣くな、泣くな、家は貧乏だ、貧乏神がまだゐると見えらあ、貧乏神奴、さては子供の好きな奴と見えるわい。」そして、力なくハハハと笑ひました。

狐の後悔と後の祭

おぢいさんがたつたひとりで住んでをりました。前には小川が太陽の光りを浴びて音もなく流れ、その向ふには田畑が町へつづいてゐました。後ろには山を背負つて、風や雨に背戸の竹籔がざわざわと鳴りました。

一日、山から枯木を拾つて歸つて來ました。そして、日溜りのいい縁側へ、やれやれとばかりにお腰をかけようとしました。まだ、お腰が半分も縁側の板にかからないとき、ひよいと見るともなしに向ふを見ますと、おぢいさんは、おや？　と、不思議さうに目をまんまるくしました。

向ふの小川の土橋の上で、一疋の狐がぴよんと後足ではねました。すると、狐の姿は花嫁がきるやうな綺麗な着物をつけました。

おぢいさんは我をわすれて、中腰のまま、この狐の樣子に見とれてゐました。狐は、おぢいさんが見てゐるとは夢にも知らず、また、ぴよんとひとつはねました。そしたら、桃割れに髪を結

つたかはいい十八ぐらゐの娘さんになりました。

ほほう、なかなかうまく化けをるわい。と、おぢいさんは、やつと、お腰をおちつけながら呟きました。

土橋の上では、娘さんに化けた狐が、まだそこを離れやうとせずに、小川の流れに自分の姿をうつして眺めてゐます。いや、自分のほんとにうまく化けた姿にほれぼれとしてゐるかも知れません。

ふふん——とおぢいさんは腕を組んで考へました。こらア、ひよつとすると、あの狐め、たれかを化かすつもりかも知れんぞ。ううん、よしよし、そんならひとつこつちから化かしてやれ。と思つて、お腰にぶらさげてゐたどうらんから煙管を出して、ポカリ、ポカアリと煙草を吸ひました。そして吸がらを掌にぽんぽんと叩いて、狐のゐる土橋の方へ向きました。

「もしもし、そこで考へてる娘さん。」と、大きい、やさしい聲で呼びかけました。

すると、狐は、おぢいさんの方を、ちらりと見て、につこりと微笑みました。そして、心の中で、うまい、うまい。人間がもう自分を狐だとは見てゐないやうだ。そろそろ化かしに出かけよ

うかなと思ひました。
「なあ、娘さんや、この邊ではいちども見かけない娘さんだな、お茶でものんで休んでお出で。」
と、おぢいさんはいひました。
「はい、ありがたうございます。」
狐は娘さんらしく恥しさうに、袖で顔をかくして、縁側に寄つて來ました。
「さあ、さあ、お茶がはひりましたよ。ときに、娘さんや、どこへ行きなさる、町へかな？　あの賑やかな町へ買ひ物に……」
さう聞きながらも、おぢいさんは、昔、狐や狸が、買ひ物に行つてはお金の代りに木の葉を使つたこと……の話を思ひ出しました。
「えい、わたし、町へ行きますけれど、買ひ物ぢやありませんわよ。」
「ぢやあ、活動寫眞かお芝居へでも行くんかね。」
「いいえ、ねえ、もつと、いいところへ。」
「ほほう、お芝居よりも、もつといいところつて、はて、何だつけ？」

すると、狐は、袂をいじつてゐましたが、
「あのね、おぢいさん。」といひました。
「え？」
「あのねえ、わたし。」
「うん。」
「あら、わたし、恥しいわ。」と、袂で顔をかくしてしまひました。
「何だよ、娘さん。」
このとき、おぢいさんは思ひました。いかん、いかん、うつかりすると、自分の方からさきに化かされてしまふぞ。しつかりしてゐなくつちやならん。と、おぢいさんは、狐の樣子を見まもりました。
「わたし、町へねえ、おぢいさん。わたし、お嫁に行かうと思つてゐるわ。」
「へえ——お嫁さんに行くのかい。そらあ、おめでたいこつた。うらやましいなあ。」
と、おぢいさんは、ほんたうにうらやましい風に目をかがやかしました。

「だつて、おぢいさんも、お嫁さんをもらつたことがあるでせう。」
「そらあ、あるさ。あるにはあるがね、そのお嫁さんはもう三年も前にお墓へ、このおぢいさんをひとり置いてけぼりにして行つちやつたよ。で、お前さんは、町のどこへお嫁さんに行くんかね。」
「おぢいさんは、いま、ひとりなの。」
狐は、おぢいさんに町のどこへお嫁に行くと聞かれて、困つてしまひましたから、わざと、とぼけたのでした。
「ああ、ひとりだよ。たれも話相手がなくつてね、さびしい暮しだよ。どうだね、娘さんや。町はそら賑やかで樂しからうが、昔とちがつて惡い人間がたくさん住んでゐるから、いつそ、靜かでのんびりしてゐるこへ、つまりおぢいさんのお家へお嫁さんに來んかな、お前さんの好きな物はどつさり食べさしてやるし、美しい着物はうんと買つてやる。目の中へいれるくらゐ可愛がつてやるんだよ。」
「ぢやあ、わたしの大好きな油あげをどつさり食べさしてくれるの。」

「そんなに油あげが大好きかい？　いいともいいとも。お前さんがもう食べきれないといふほど食べさしてあげるよ。」と、おぢいさんはずるさうに笑ひました。
「そんなら、わたし、おぢいさんのお嫁さんになつてあげるわ。」
狐はおぢいさんのお嫁になることになりました。すると、長い話にくたびれて來て、おぢいさんの前で、コツクリ、コツクリと居眠りをはじめました。
これは狐のしくじりでした。おぢいさんの家へお嫁ときまると、狐は自分のお家のやうに思つてしまひました。ただかはつてゐるのは、緣側でしたから、お山の巢に敷いてある枯草の上で寢るのと違ふだけでありました。が、うららかな太陽がさしてゐます。狐は氣もちよささうにコツクリ、コツクリと居眠りをつづけました。
「しめた。」と、おぢいさんは、居眠りをしてゐる狐を素早く繩で縛つてしまひました。
きゆうとしめる拍子に狐は目をさまして、びつくりしました。
「おぢいさん、おぢいさん、何をなさるんです。おぢいさんのお嫁さんではありませんか。かはいがつてやるつていつたではありませんか。あんまりひどいわ。」と、あわてていひました。

「ふん、ばか狐め、まんまと化かされたな、ハハハ。」と、おぢいさんは大聲あげて笑ひました。
「お前は化けるになかなかうまい狐だ。わしは町へ行つて見世物にするよ。その代り、お前の大好きな油あげは、約束どほり、どつさり食べさしてやるからな、町の人間樣に化けるところをうまく見せておくれ。」
「おぢいさんはひどい。わたしを狐と知つてゐて、うそをついた。あんまりひどいわよ。」と、狐はおひおひ泣きだしました。
けれども、もうしかたがありませんでした。相手が強い人間で、おまけにこんなに高手小手に縛られてゐます。狐は、自分の化かされたことにシクシクと泣きました。

月の光りの中で

一、

月のいい晩でした。深い森の中で、大ぜいのけだものたちが樂しさうにお話をしてゐました。
ぐるつと、めいめいが車輪に無作法に坐つて、並べられたご馳走をべちやくちやと食べながら、お話のあひまには、みんなが大きい笑ひ聲を無遠慮にたてました。夜が更けて月は森の上に來ました。そして、木の間をもれてそこを明るく照らしました。
「ああ、いい月だ。」と、うさぎが赤い瞳をあけていひました。
「ほんとだ。」と、くまは、うさぎの言葉にひきつけられたやうに大空を見あげて、「ほんたうだ。」と、もういちどいひました。
すると、みんなは、べちやくちやと食べてゐたご馳走を下に置いて、森の上を見ました。
「きれいだ。」

「きれいだ。」
「きれいだ。」
思はずみんなは、ひとつの言葉に引つばられていくやうに輕い溜息をしました。そして、默つて、うつとりと、どこまでも澄みわたつた月のほの青い光りを見てゐました。
「何とうつくしい色ではないか。」と、そのとき、ししがいひました。
みんな默つたまま、また、月を見ました。心からうつくしいと思つて見ると、不思議にも、いままでに見てゐた月とは全く別な、いま始めて見るやうな月に見えました。
「どうだ、この月のやうに、われわれも、うつくしい清々とした心もちになつてみたいものだ。こん晩、ひと晩でもいい、たつたひと晩だつていい——」
ししは、その月の光りの中へ、頭をつつ込んでいくやうな氣もちで、柔かい聲でいひました。
「じつに、いいことだ。」と、とらが、すぐに賛成しました。
「じつさい、いいことだ。」くまがいひました。
「よろしい、やらう。愉快なことに違ひないぞ。」と、ぞうがいひました。

「自分で悪いことでないと思つてゐても、他の目から見ると悪い行ひをしてゐたかも知れない、さういふことを話あふことは、こん夜のやうな、かうしたうつくしい月の光りの中で大いにやるべしだ。」と、きどり屋のきつねがいつて、笑はれました。
「ざんげ。」
「ざんげは面白いね。」
「ぢやあ、はじめよう。」
「たれから——」と、たぬきが、さういつて一座を見まはしました。
「さうだな、大ぜいゐるから、とても、みんなといつても出來ないなあ、では、くじ引きで、こん晩は二つだけのお話にしようではないか。」と、うしがいひました。
「さうしよう。」と、そこで、そこらの木の枝をべしべしと折つてから、くじをこしらへました。そして、めいめいが何のわだかまりもない心で引きました。
「どんなくじが、お話をする番だ？」
「おや、おれのは、ばかに短いなあ。」と、きつねが、みんなのくじと見くらべていひました。

「あ、その短いやつが、お話をするんだよ。ひとつはきつねだと、それから、もうひとつは、いつたいたれが引いたんだい。」
「おれだよ。」と、ししが、にやにや笑ひました。
「きつねと、ししか。面白いぞ。」
「うん、なかなか面白いな。」
「ぢやあ、きつねからお話をはじめてくれ。」
「よし。」と、きつねは、水をいつぱい飲んでから、坐りなほしました。そして、「エヘン。」と、咳ばらひをしました。
「おい、きつね、エヘンぢやないぞ。コンコンといふもんだ。」
たれかが、さういひましたので、また、大笑ひになりました。

二、

「ぢや、ボツボツと話さうかな。」と、いつて、「おれには格別面白いお話つてもつてゐないよ、でも冬になると、第一に困つちまふことは、食べ物だなあ。」

「そりや、たれだつて困ることさ。」
「冬が來て、そこらがまつ白くなつて、谷だか路だかがわからなくなると、おれは、雪を踏んで山をおりていつた——。」
「どこへいつたんだい。」と、せつかちのうまがききました。
「默つてゐろ、言はずとも知れてる、里へいつたのさ。」
「さては、こいつめ、鷄どろぼうだな。」と、うまは、さういつて鼻の先きで、ヒヒンと笑ひました。
「うん、殘念ながら、さういふわけだ。しかし、しかしだね。」と、きつねは目を細くして、一座を見まはしました。
「どろぼうといつたつて、始終はやつてゐないさ、それも冬の寒いさ中で、山の上に食べ物が無くなれば、さうでもして、食べなくちや、死んでしまふからな。」
「だつて、どろぼうは、一等悪いことだぜ。」
いままで默つてゐましたひつじが口をはさみました。

「そりや、きみ、なるほど悪いことに違ひない、そこで、しかしだね、そのどろぼうも、時ど場合によりけりだ。なぜなら、ちやんと働けるものが、不精にも働かないで、どろぼうを稼ぐことは、むしろ憎むべきことだ。が、働いても働いても、または、働けなかつたりして、食べる物もない、恵んでくれるものもない、といふときには、止むを得ないぢやあないか。」

「それは、きみの理窟だよ。」

「理窟だつていい——凡そ生き物は、食つて、その日を過ごせば仕合せだ。」

「きみは悪魔の弟子だ。」

「ふん、きみは、キリストにかはいがられたな。ざまアみろ。しかしだよ、きみ。これはおれたちが悪いためぢやない。みんな、神さまがいけないのだ。」

「と、言ふと、」

「たとへばだね。ここにひとつの物を神さまがこしらへたとする、それから、また、別なものを向ふへも、あしこへもこしらへた。さうして神さまは、これでいいと呟いた。そして滿足した。ところが、豈計らんやだ。それらのものからひとつづつ、大切な物をわすれてゐたことに氣がつ

かなかつたのだ。」

「それは何だ。」と、とらが、怒鳴るやうにいひました。

「不仕合せだね、われわれは、そのひとつだけで、みんなの仕合せをお互ひに奪ひ合つてゐるのだ。」

「だから、それは何だ。」

「どろぼうも、仕方のないことさ。」

「こら、早く、わけを言はないか。」

とらが、きつねの襟首をぎゆつとつかんでおどかしましたので、びつくりしてしまひました。

「言ふよ、手を放しておくれ。」

「さあ言へ。」と、とらは口ひげをビリビリと動かしました。

「他でもない、食べ物をわすれてゐたのさ。」

「ばかめ、このばかッ。お前はじつに狡いやつだ。さあ、脱線せずに、さつさとお話をしろ。」

ししは大きい目をいつそう大きくして睨みつけました。ぞうは、みんなから、さんざんにいぢ

められてゐるきつねを見て、ひとりで、にこにこ笑つてゐました。
「だつてイブもー――」
「それがどうしたんだ」
「あれも、食ふに困つて、禁斷の果實つてやつを、食べたのさ。」
「アツハツハツハ。」
「ハツハハ。」
きつねの眞面目な顏を見ると、みんなは、どつと、笑ひころけました。
「さて、あれは――」と、きつねは、笑ひもしないで話をはじめました。「さうしたわけで、どろぼうは時と場合で、決して惡いことではないと思つて、里へおりていつたのだ。」
「どろぼうたあ、お前のことさ。」
「いやになつちまふなあ。」
「なぜ?」
「どろぼう圖々しいつて、よく言つたもんだ。」と、また、たれかがいひました。

「あれだ、一言目には、どろぼう、どろぼうつて、言ふんぢやないか。」
「ほんたうのことさ。」
「おい、きつねそんなことをしてると、いまにお巡りさんにとつつかまるぞ。」と、さるが、鼻をクンクンならしました。
「詰らない――」と、きつねは、不機嫌な顏をして怒りました。
「全くだ。」
「つまらない。」
きりんが、長い首をのばして、あくびをしましたので、みんなは手を叩いてはやしました。
「よさう、ばかにしてらあ。」きつねは、プンプンと顏をまつ赤にして怒つてしまひました。

三、

「おい、ほんたうに怒つたのかい。」と、ぞうが、やはり細い目にしはをこしらへていひました。
「うん、怒つてるよ。だつて、おれのお話がめちやめちやになつたんだもの。」きつねは、さういつて、ごろりと横になりました。

「ふん、面白くもないや。」

と、みんなは、さういつて、また、ご馳走をべちやくちやと食べはじめました。あぐらをかいたり、足を投げ出したり、横ひざをしたり、たれも滿足にきちんと坐つてゐるものがありませんでした。そして、たれも、それをとがめようとするものもありませんでした。自由なその振舞ひを木の枝のすき間から、月の光りが笑つてゐるやうに、チラチラとさしてゐるばかりでありました。みんなは、しかし平氣で、べちやくちやと食べました。

「どろぼうの話を聞くなんて、いやアなこつた。」と、ひつじが言ひ出しました。

「惡いことではない、が、いい氣もちはしないね。」と、たぬきがいひました。

そこで、みんながまた騷ぎはじめました。ひつじに味方するものと、そして、たぬきに加勢するものとが、めいめいご馳走を口の中に運びながら、いひ合ひをしました。

「まあ、そんなことはどうだつていいぢやないか、われわれには、少くとも面白いことでない。それよりかこんどは、ししのお話を聞かうではないか。」

「ああ、さうだつた。」

「けど、どろぼうのお話ではないだらうな。」

「また、喧嘩になるぞ。」

ししは笑つて、みんなの言ふことを聞いてゐました。

「この月の光りのやうに、美しいお話をしなくちやいけないよ。」

「うん。」と、ししは點頭きました。

「それぢやあ、お話をはじめてくれ。」

「ああ——」

ししは、顔へ落ちてくる毛をかきあげながら、ちつと、木の間から大空の月を見あげました。ししの心は、非常にさわやかになつてゐました。さうして、「さて」と、ししが言ひはじめますとみんなは、またもや、ご馳走を下に置いて、俯向いて耳を傾けました。

四、

「昔、おれは、ふとして間違ひから人間を食べたことがあるがね。」

「人間を？」

「ああ、それも人間の子供なんだがね、いま思ひ出すと、じつに怖ろしいことであり、かはいさうなことだつたよ。」

「うん、そらあ、ひどいことだ。」

「怪しからんことをしたな。」と、ぞうとくまとが、笑ひ聲で言ひました。

「どうだつた、さぞ、甘かつたんだらうなあ。」とらが、かがやかしい目をしてききました。

「そらあ、おいしかつたよ、わすられない。」

「さうだらうとも、大たい、人間は見るからにして、うまさうだからな。」

「さうだ、そして人間ほどぜいたくで横着なやつはないぜ。われわれを常に食べ、鳥るいや魚るいを食べ、野菜をどつさりと食べてゐるんだから、そりや、きみ、おいしいにきまつてゐるんだよ。」

「おれも、いちど、ぜひとも食つてみたいもんだなあ。」と、よだれをタラタラ流して、とらがいひました。

「さてと、その日は、朝から不仕合せにも何ひとつ食べ物が無かつたのだ。それで、お正午近くまで、家の中でごろごろとしてゐたけど、だんだん、めまひがするほどお腹が空いて來たんだ。そんなことならいいがね、腹の蟲がキユウキユウと泣くのさ、で、仕方がないので、水でも飲んで今日を過さうと思つて、ふらふらと外へ出て、一マイルほども向ふの川へ歩いて行つた。すると、どうだ、たいへんにいい匂ひが、ブーンと、おれの鼻を掠めるぢやないか、そのとき、おれの目が光つたな、キラリと物凄いほど光つたんだ。さうして匂ひを追ふて、まつしぐらに駈けつて行つたのだ、そこには、かはいい人間の子供が、すやすやと寢てゐる他に、たれひとりもゐなかつた。で、おれは、われをわすれて、ひと息にやつてしまつたんだ。そして、川べりにおりてお腹いつぱいに水を飲んだといふことさ。」

しゝはさういつて、深い深い溜息をしました。

「それから——」

「それでおしまひさ。」

「どんな氣もちがするんだね、今——」

「さうだな、そのときは、とても素晴らしい愉快な氣もちではあつたが、いまでは、考へるも不

愉快なものさ。」

さうして、その子供の親の嘆きを思ひました。自分の子は生れて三日目には、谷底へ落してまでも、けだものの第一の強いものにしてやらうと試みる親ごころより、人間の子供に對する情はもつともつと深いものであらうと考へずにはゐられませんでした。

「ほんとに悪いことをしたもんだ。」と呟きました。

「それでいいんだ。それで、きみの罪は、すつかり消えてなくなつたわけだ。」

ぞうが、慰めるやうに言ひました。そこで、みんなが、またいつそう賑やかに、ご馳走をぺちやくちやと食べはじめました。氣のめいるししの心を引き立てるやうに、くまは、愛嬌よく調子外れな唄をうたひました。そのとき、ひとりすねて寝てゐたきつねが、むつくりと起きあがりました。

「なんだい、ばかにしてゐらあ、どろぼうのお話を嫌つて置いて、人殺しのお話に涙を流して喜んでゐらあ、畜生、ざまアみろ。」

さう言つて、きつねは、前にあつたお酒をガブガブと、やけにのみつづけました。

不仕合せな兵隊の話

都をとほくとほく離れた野原の林の中に、小鳥が一羽の子供の小鳥をつれて住んでゐました。

「お前、もうすこしすると、林の木の葉が黄金や赤色になつて、パラパラと地面に落つこちて寒い風が、毎日、吹くやうになるからよく氣をおつけな。」と、子供にいひました。

「え、木の葉が黄色くなつたり、赤くなつたりするの、不思議だなあ、こんな元氣のいい青い葉が、そんな風に地面へ落つこつちやふの、いやだなあ、母さん。」

子供はかなしげに、林の中を眺めまはしました。

「いいえ、お前、そんなことは何でもないことよ、その頃になると、わたしたちは、もつと恐ろしい、ひどい目にあはなくちやいけないのよ。」

「うん、わかつた、林の中が明るくなつて、何もかもよく見えすいて、ぢきに、鷲や、鷹や、梟に捕まつちやふつていふんだらう。」と、子供は元氣にいひました。「あたい、もうこんなに翼が丈

夫になつたから急いで逃げられるよ。」
「いえ、いえ、お前、そんな仲間同士の喧嘩みたいな騒ぎぢやないよ、もつと恐ろしい。」
そして小鳥は自分の言葉に我知らずぶるると身ぶるひして、ぢつと子供をみつめました。
「もつと恐ろしいつて？　母さん。」
「え、さうよ、もつと恐ろしいのよ、お前、その頃になるとね、人間が犬をつれて鐵砲をうちに來るのよ。」
「鐵砲をうちに來るつて？　母さん、誰をうちに來るの、あたいたちは……」
「いいえ、みんなあぶないのよ、仲間のものたちも、そして、木の下で遊んでゐる兎や狐などの仲間も、みんな、鐵砲で狙はれるのよ。」
けれども、子供は、そんな話をほんたうだとは思へませんでした。しばらく、ぼんやりとしてゐましたが、
「母さん。」と、胸を丸くふくらませていひました。「あたいたちは何も悪いことをしないぢやないの、毎日、かうして小枝から小枝へわたりながら唄をうたつたり、餌を探しにそこらを飛び歩いたりするだけぢやないの、何で、あたいたちは、鐵砲で狙はれたりして、びくびくしなくちやならないの。」

「まあ、お前、そんなに氣をいらいらしてはいけません。鐵砲をうちに來る人間は、人間の中でもいちばん悪い奴だからね、仕方ないのよ。」
「母さん、母さんのいふとほりでせう。」
「まアお聞き、その人間はね、ブルジョアといつて、貧乏人を苛めて苛めぬいてる人間なのよ。安いお金で、二倍も三倍も働かして、例へば貧乏人が一圓の所を働いても、三十錢だけ給金に拂つて、あとは自分で横取りするやうな鬼みたいな人間なのよ。」
「なぜ、そんな悪い奴に鐵砲を持たすの。」
「仕合ないわ、貧乏人から横取りしたお金で鐵砲をうつてもいいといふ税金を拂ふんだもの、きつと、退屈してるわ、人間を苛めたりないとみえて、鐵砲をうちに來るんだから。」
するうちに、林の木の葉が、黄色くなつたり、赤くなつたりしたかと思ふと、ふいに、寒い北風が吹いて來て、木の葉をパラパラと落としはじめました。

その頃でした。子供の小鳥が、ふと騒がしい物音を聞きつけましたので、よくその方を見ましたら、鐵砲を擔いだ人間が、かけながら、何百人もやつて來ました。

「母さん、母さん、たいへんだ。ブルジョアが鐵砲をうちに來たんだよ。母さん早く逃げよう。」

子供の小鳥はあわてふためいて、母さんのまはりを、ぐるぐる飛びまはりました。

折から、何かひと聲が叫んで、パラパラと鐵砲の音が響いて來ました。すると、子供の小鳥は顏色をかへて、もう飛びまはる元氣もなくなつて、母さんの傍にとまりました。

「いいえ、あれは心配のない人間よ。」と、小鳥が、そつと、ささやきました。

「だつて、鐵砲をもつてるブルジョアぢやないの、怖いよう。」子供はふるへました。

「あれは兵隊なのよ。わたしたちをうつんぢやないから、安心しておいで。」

「母さん、兵隊だつて、ほら、また、鐵砲をうつてるぢやあないの。」

「まあ、お前はぶるぶるしてるのね、大丈夫だわ、あれはね、人間を殺すおけいこをしてゐるのよ、兵隊は、決して母さんやお前や、けだものをうたないのよ。」と、母さんは笑ひました。

「え？　人間を殺すおけいだつて、何のために？　そんなら、ブルジョアと同じいやうに惡い人

間だね、母さん。」

「いいえ、お前、兵隊は不仕合せな人間なのよ。あのひとたちはみんな仕方なしに鐵砲をうつてるのよ。あのひとたちはみんな貧乏人の味方よ。プロレタリヤよ。いい人間なのよ。だから、お前、そんなにびくびくせずに見ておいで、人間が人間を殺しあふおけいこをね、面白いのよ。だが、兵隊は不仕合せだわ。」

「鐵砲なんてうつひとはプロレタリヤだつて惡いや。」と、子供がいひました。

「お前はまだ分らないね。ご覽、あそこに洋刀といふ長い劍をふりあげてゐる奴がゐるでせう。あ奴と同じ身なりの奴が他にもゐるでせう、あ奴たちを將校といふの、ブルジョアなのよ、あ奴が、洋刀をふりあげて黃色い聲で叫ぶと、かはいさうな兵隊たちは、人形のやうに踊らなくちやならないの、どんなに空じい時でも、どんなに眠い時でも、暑い時でも寒い時でも、ああして野ッ原や、山ン中を駈けずり廻らなくちやならないし、自分では殺したくなくつても、相手を殺さなくちやならんのよ。あの人達の國の法律がさうきめてあるのよ。ご覽、洋刀をあんなにふりあげて、何か叫んでゐるあのブルジョアの顏を、まるで、醉つぱらつた鬼みたいだわね。」

◎山田清三郎氏をして今日あらしめた其の處女作集を見よ!!

解放群書(4)

山田清三郎著

四六判三百頁

定價壹圓送料拾錢(半額版もあり)

幽靈讀者

新聞評の一節

◇……就中「幽靈讀者」の如きは、發表當時、評壇の重鎭生田長江氏は「報知」誌上に於て、「……加之、讀んだあとでは、舊い新しい色々の大切な問題を考へ改め、感じ直すことの機を與へられた。近頃の佳作の一つである」と激賞し、また「朝日社を喰ふ」が最近某大雜誌に出づるや、東洋第一を以て任ずる「大阪朝日」の一手販賣所たる北尾新聞舗の調査部及び都下某大新聞の某最高幹部の如きは、その影響すること甚だ大なりとして痛く狼狽の色を現はし、愴惶として態々該小說の掲載誌を大部數購入した事實がある。

◇現代の新聞事業ほど、資本主義經濟組織の戰慄すべき罪惡を、如實に暴露してゐるものはない。本書收むるところの創作の多くは、プロ文壇の鬼才暴露小說の開山たる著者が、今日の新聞事業の、驚くべく憎むべきカラクリに對して、峻烈極まる解剖のメスを加へたもので、その社長たると配達人たるとを問はず、およそ新聞事業に關係を有するものは勿論、苟も多少新聞紙及び社會問題に關心をもつほどのものは、須く一讀するの必要がある。

内容目次

△幽靈讀者……
△嘘……
△特種事件と共襃……
△或る雜誌記者と小說家……
△二新聞の競爭と一人の苦學生……
△棄權……
△角帽と勞働者……
△もどかしき苦悶……
△或る皮肉……
△新聞社を喰ふ……

◎本書は日本暴露小說の開山、問題の新聞征伐傑作集である!!

『解放群書』『宣傳書』『解放』誌及月刊『放解』發行所

解放社

東京市芝區新櫻田町十九

振替東京三六四四九番

無産階級的智識の武器を求める無産階級必備の大寶典！

◇著者は雜誌「解放」の元主筆。現に左翼陣營隨一の理論家。本書は一名社會主義大辭典。特色は精密簡明文章の流達平易。其内容ザット左の如し。

◇第一章　空想的社會主義
◇第二章　國家社會主義
◇第三章　無政府主義
◇第四章　サンヂカリズム
◇第五章　ギルド社會主義
◇第六章　科學的共産主義（マルクス主義）
◇第七章　ボルシエヴィズス（レーニン主義）

解放群書（23）

山内房吉著

四六版二百頁　定價壹圓　送料拾錢

社會思想解說

◇社會は進展する、その進展の理法を說くものは社會思想である。故に社會思想は無産階級の思想的糧であり、唯一の武器である。これなくして、無産階級の進出はあり得ない。

◇社會發展の各段階に於て、無産階級は如何に思考したか？　現段階に於ては如何に思惟するか？　その各段階の各種の社會思想、思想家及びその術語等に至るまでを、精密に系統的に解說したものが本書である。

◇本書は實に無産階級の寶典、社會主義の字引である。

古今東西の各段階に於ける各種社會思想の精密なる大辭典！

發行所　東京市芝區新櫻田町十九番地　振替東京三六九四四　解放社

無産階級の獨裁なくして革命藝術の獲得なし（レーニン）

革命藝術大系なくして無産階級藝術なし

本書目次大要

革命と藝術
革命藝術大觀
革命文學論　文壇一般、文壇の中心、新作家の群、作家の自傳、作品の内容、文學雜誌、文壇挿話
革命詩壇
革命美術　美術一般、アツハル、現代彫刻展覽會
革命樂壇
革命演劇　ルナチャルスキーと演劇、第四研究劇場、芝居を工場の中で打つ、新しい舞臺裝置者
附錄　墓の上に、中隊へ、アジアから、人から、曠野、永潛り、教師の少年及青年時代

解放群書（24）

尾瀨敬止著

四六版二百卅頁　定價壹圓　送料十錢

最新刊

革命藝術大系

◆「無産階級の獨裁なくして革命藝術の獲得はない。」凡てが有産階級的であつて、獨り藝術のみが無産階級的であり得ない。ロシアは世界唯一の無産階級國であり、其處に初めて無産階級藝術があり得る。しかして無産階級の革命と同じく、血苦十年の歷史を持つ。

◆日本に於ても現今頻りに無産藝術が問題され、理論鬪爭對立發展が進行する。しかし「革命藝術の把握なくして無産藝術の確立はない。」本書は斯界第一の權威たる著者が、十月革命十週年を紀念するため、刻苦十年の研究を傾け、十月藝術十年間の苦鬪奮鬪並に、文壇、畫壇、詩壇、樂壇、藝術家、藝術團體の現狀現勢を、歷史的、紹介的、組織的、體系的に著述し、尙代表作品數種を附錄した鳥瞰圖であり、縮寫圖であり、シネマであり、パノラマである。其價値や知るべきのみ。

◆「革命藝術大系なくして無産階級藝術なし。」苟くも革命藝術を語り、無産階級藝術を創らんとする程の者に敢て本書を薦む。

革命藝術の把握なくして無産藝術の確立なし（尾瀨敬止）

發行所　東京市芝區新櫻田町九十番地　振替東京三六九四四　解放社

最新刊

未来をめぐる幻影

〔解放群書〕(25)

神近市子著

◇四六判二百五十頁
◇定價壹圓送代拾錢

内容

◇未來をめぐる幻影
◇アイデアリストの死
◇あるの改造
◇鼻の一角
◇古の街
◇雄阿寒おろし

東京芝區新櫻田町十九
解放社
振替東京三六九四四番

◎プロ大家傑作集が出るとすぐ正、續、續、續々、と賣切になったは何を語るか？

◇國本にして本書の如く貴玉尊寶を集め得たるもの他にありや？
◇プロ大家にして遂に其の傑作を本書に寄せざりしもの一人にてもありや？
◇本書掲載の約壹百編は皆之れ約壹百名家の名編傑作、本書は實に現代プロ諸大家人名辭典並に全日本無産派文藝傑作見本展覽會の觀あり!!

解放群書(27)—解放社編—菊判八百頁—同二冊箱入—定價壹圓送代拾錢

終篇 續プロ大家傑作集

〔内容一瞥〕

後等蘇生らば……小川未明
斷腸……中村吉藏
拜金家……鷹野つぎ
石佛とお夏……中西伊之助
大工の弟子……吉田金重
甲板上の寂寥……里村欣三
紙幣の戯れ……大島萬世
馬の事件……山川亮
馬と人の群像……
光へ跪く鍋手……秋田雨雀
カレンダー・ローラ……大山廣光
呪……辻本浩太郎
心……渡部信義
人夫市場……内藤辰雄

飯の前後……今野賢三
鶏網……梅山義春
類……西光萬吉
種……
投げすてよ！……
春の一回札事件……平林たい子
夜明る工場……黒島傳治
留置場の午後……野口健二
鬼……松古命三
灯……北川千代
夜の電信機械室……
齋藤喜一郎
新らしき童話……飯田豊二
合……荻原恭次郎
言葉……翁久允
親分……
煙……
突……奥村五十嵐

都合といふもの……細田源吉
勞働者ヨウリス……小野十三郎
診察室……落合三四郎
不思議な涙……諏訪三郎
埃……高橋季雄
妻……高群逸枝
叔父……神近市子
貧しき者は幸なり……
大變なことに……
狩野鐘太郎
車の熊さん……佐々木俊郎
結婚式……松本淳三
沼向ふの赤い空……
犬……田邊
其他數十編

『解放群書』『宣傳用書』及月刊誌『解放』發行所
解放社
東京芝區新櫻田町十六
振替東京三六九四四番

◎論より證據百聞は一見に如かず先づ一本を買つて熟讀するの勇なきか？

◎社會主義隨論集は出るとすぐ正、續、特、續々と皆賣切絶版になった!!

◇本書載するところのものは、有らゆる名士闘將學者運動家の有らゆる題目を提へこの論戰研評、隨想隨筆、詩歌慷慨等々々資料あり、統計あり、政治經濟に世界觀あり、文藝論あり、一編よく全世界を盡くす。

解放群書(28)—解放社編—菊版千餘頁全二冊箱入—定價壹圓送代拾錢

終篇

續社會主義隨論集

◎論より證據百聞は一見に如かず

論より證據百聞は一見に如かず

内容の一部

◇ボルシェヴィズム・レーニズム・マルクス主義・共産主義・無府政主義・宗派分裂主義・大衆統一主義・社會主義・議會主義・社會改良主義・社會民主主義・サンジカリズム・勞働組合主義・アナルコサンジカリズム・等々々の解說・批判・討究等々々。

◇時評・月評・安評・論策・批判・感想・隨筆・檢討・研究・統計・會計・新刊批評・等々々。

◇藝術・無産派藝術團体・無産派藝術家・無産派藝術・無産階級運動・無産派雜誌・無産藝術家・無産派雜誌・藝術・等々に對する論評・批判・紹介・解說・主張・等々々。

◇婦人問題・女工問題・勞働問題・小作問題・水平問題・學生問題・思想問題・政黨問題・革命問題・文藝問題・解放問題・選擧問題・對支問題・生活問題・反動政府の反動政策問題・等々の解說・檢討・對決・解決等々々。

◇女流作家評・無産文藝家評・無産雜誌評・新選代議士銘々傳・日本低能家列傳・日本社會運動家列傳・等々々。

◇生活記錄・生活哀史・生活物語・詩歌猥談・美文惡文・駄文雜文・寫眞繪畫・漫畫漫錄・漫罵漫心・漫文瞞着等々。

◇卷頭言・編輯言・一切言・合切言・解放彈天眼鏡・前哨線・迫擊・要擊・逆擊・社告・急告・廣告・報告・原告・被告・雜誌報告・等々々。

◇言論壓迫法・新聞雜誌出版物法・治安維持法・治安警察法・借家借地法・健康保險法・著作權法・唯物辯證法・等々々。

◇テーゼ綱領總まくり・無産黨・勞働組合農民組合・共働組合・消費組合・無産團体・等々の現狀・現勢と其の壓迫・迫彈壓史・悲史哀史諸氏氣焔史・誤辭・本音・等々。

『書群放解』『書用傳宣』及月刊誌『放解』發行所 解放社 東京芝區新櫻田町十九 振替東京三六九四四番

◇女性運動研究家は先づ女性勞働運動史を研究しろ!

解放群書(29)—赤松克麿明子共著—特別上製箱入四六判三百頁—定價壹圓送料拾錢

◇女性問題研究家は勿論の事、社會運動研究家も婦人運動研究家も是非この世界的名著名譯を一本購求讀破する必要がある。

◇圓本家は勿論の事、出版家も著述家も是非この壓倒的特別廉價版を一本購求熟考する必要がある。

◇本書は嚢に厚生閣から壹圓八十錢で出版されたものと同一物なる特別上製の新版である。絶對必要上壹本を購求した女性問題、社會問題の研究家は、傍ら又、世界の定評ある、この名著のこの名譯が、こういふことを研究する必要がある。

内容

◎序
◎初期の婦人勞働組合
◎婦人聯盟並婦人團體の設立
◎男子組合の開放
◎全國聯合會及近代組合運動
◎歐洲大戰の危機以後

◇婦人運動を知らんとせば先づ英國婦人勞働運動史を知れ!

『書群放解』『書用傳宣』及月刊誌『放解』發行所 解放社 東京芝區新櫻田町十九 振替東京三六九四四番

◇革命家の血汐！其は又世界到る處で流される尊き血汐である！！

△殉難革命家の血汐！それは決して無益に濺かれた譯ではない、それは、今なほ流れつゝある。

△マルクス、エンゲルスの思想が、世界の岸を洗ふ思潮の源流であるにしても、その流れを巨大にし、より力強きものにしたのは、殉難革命家の血汐である。

△ジャン、ジョレス、カアル、リイブクネヒト、ロザルキゼンブール！、かれ等の血汐は、今なほ流れつゝある、世界の岸に沿うて！？。

△いな、いな、それはいまや諸君の脈管の中に流れつゝある!!

◇宣傳用書(9)—守田有秋著—定價半圓　送代拾錢

遭難主義者列傳

◇マラアミシャロット・コルデイ……
◇バベエフの死及び其遺書……
◇ジャン・ジョレス世界大戰勃發前夜の死……
◇ウオロフスキイの死……
◇ボリイス・ザアインコフ……
◇ヤーコウレフ……
◇ブレエヴエ暗殺記……
◇ラザアレミ其の死……
◇フウゴオ・ハアゼの遭難……
◇クルト・アイスナア……
◇ミユンヘン革命の悲劇
◇ランドダウアーの虐殺……
◇エルンスト・トオラア……
◇リーブクネヒトの詩と其最期……
◇ルキゼンブルグの書翰と其最期……
◇ゲーテの冷靜、宇宙の中心……
◇支那革命犧牲の人々……

附錄・山川均著　露國憲法完譯

解放社　東京芝區新櫻田町一九　振替東京三六九四四番
「解放」及月刊「解放」發行所　「宣傳用書」「解放群書」

◇露國憲法完譯？其は又日本にタツタ一つしかない尊い完譯である??

◇あらゆる社界革命の裏には必ず醱酵素の女性がある（マルクス）

解放群書(31)—水野正次譯編—四六美判—定價金壹圓
橋浦泰雄裝幀—約四百頁—送代十六錢

婦人運動當面の諸問題

◇革命の裏には女がある（マルクス）女なくして何の鬪爭ぞ（レニン）まことや廣汎なる婦人大衆の獲得は今日我等に課せられた最大最重の任務である。本書はこの意味に於て婦人運動當面の諸問題を最も系統的に最も統一的に譯編解明した自信の著述である（著者）

本書は婦人大衆獲得、統一戰線形成の爲にマルクス—レニンの意圖に從ひ、最も系統的に婦人運動當面の諸問題を解明譯編したものである（著者）

◇然らば本書なくして婦人問題の解決婦人運動の把握、婦人大衆の獲得、無產婦人の解放、無產階級の○○はあり得ない。苟も婦人に關心を有するあらゆる人士に一本を奬む（發行者）

【容內】

◇（前編）勞働婦人と產業の合理化
◇（後編）婦人運動の理論と戰術
◇（附編）婦人の解放と政治

◇婦人の參加なくして眞の大衆鬪爭は決して夜が明けぬ（レーニ

解放群書「宣傳用書」　解放社　東京芝區新櫻田町一九

解放群書(22)

各國著名文書集

守田文治著

四六版 定價壹圓 約三百 送料拾錢

著者曰

本書輯集の世界各國著名文書は何れも石川・堺・山川、其他の畏友先輩に負ふ所甚だ尠少ならずと雖も、亦著者半生の苦心に成れる心血の結晶ならずとせず。

内容大略

◇獨逸の部

○ゴータ綱領○エルフルト綱領○イエナ大會に於けるベーベルの演說○獨逸獨立社會黨大會決議○リイブクネヒト絕筆

◇佛國の部

○ジャコバン倶樂部の演說○バベエフの平等の宣言○バベエフの主義○巴里コムミユン經過○コムミユン最初の布告○ヴアンドオムの布告○大都市に對する布告○佛國社會黨綱領

◇英國の部

○英國民主同盟綱領○フエビアン協會設立趣意書

◇露國の部

○露國社會民主黨の決議○社會革命黨の布告○水兵の宣言○農民組合創立會の決議○交戰國の人民に○獨逸兵士兄弟總てに○ロシア憲法

◇インダナショナル

○萬國勞働者同盟創立宣告○ジエネバ平和大會參加宣言○社會民權黨國際同盟○萬國の勞働者に訴ふ

發行所 東京市芝區新櫻田町十四番 東京振替 解放社

◆著者の「世界著名革命文書」と「殉難革命家」とはすぐ禁止

解放群書(33)

世界革命婦人列傳

守田有秋著

四六美裝 二五〇頁 定價壹圓 送料拾錢

◇何の間違か本書は未だ禁止命令なき故遲れ馳せ乍ら廣告をする。

目次大要

序文……(一)
露西亞
露國革命の母(プレシコウスカヤ)……(三)
ソフキア●ペロウスカヤ……(八)
ウエイラ●ザツスリツチ……(三)
クルプスカヤ●ウリアーノワ(レーニン夫人)……(三六)
アレキサンドラ●コロンタイ……(五一)
勞農ロシヤ視察記……(六三)
マリア●スピリードノーワ……(七五)
イスネ●アルマン女……(七八)
英吉利
エメリン●パンカースト……(八二)
女權擴張示威運動……(九四)
佛蘭西
ルイズ●ミツセル……(一〇七)
ギルボウの瑞西追放記……(一一九)
米國
エマ●ゴオルドマン……(一二九)
伊太利
アンダエリカ●バラマノワ……(一五三)
獨逸
ローザ●ルキセンブルグ……(一五九)
クララ●チエトキン……(一七一)
ミンナ●ガウエル……(一八一)
中華民國
宋慶齡女史(孫文夫人)……(一八七)
何香凝女史(廖仲愷夫人)……(一九一)
附錄
大須賀里子女史……(一九五)
堀保子女史……(一九七)

群書と用書

定價壹圓 送代十錢

○新居格傑作集月夜の喫煙
○青野季吉隨筆論文集
○山田清三郎傑作幽靈讀者
○山崎『地震憲兵火事巡査』
○幸德秋水全集四册(名文集書簡集評論集文藝集)
○消費組合の理論と實際
○山崎疳作集辯護士大安賣
○石川名著世界社會運動史
○岡陽之助日本社會運動史
○近藤榮藏露國革命運動史
○佐倉啄二製絲女工虐待史
○赤松英國婦人勞動運動史
○小川未明傑作彼等甦らば
○中西伊之助武左衛門一揆
○山內房吉社會思想解說
○尾瀨敬止革命藝術大系
○神近市子女史傑作集
○水野婦人運動當面諸問題
○無產派傑作集上下千頁
○無產派隨筆論文集上下二册
○入交紗社會主義童話讀本
○本莊可宗勞農解放辭典

◆本書及本著者の「ユートピア全集」はまだ?

(定價皆各壹圓 送代皆各十錢)

『解放群書』『宣傳用書』及月刊誌『解放』發行所 解放社 東京芝區新櫻田町十九番 振替東京三六九四四

◎重版又重版！ 噫！ 幸德秋水の○○

◆文豪秋水幸德の名文は世既に定評あり。後世評して教科書中の教科書、國民文學の精髓、萬人必携の大寶典と稱する又故あり。

新重版

解放群書（7）一本 社編 一四六判 二百頁 定價壹圓送代拾錢（半額宣傳版あり）

◎秋水の名文は世既に定評がある、豈茲に贅するを要せんや。

〔內容一般〕

■隨筆集……○世田ケ谷の襤褸市○東京の木賃宿○歌牌の娯樂○排流行論○菜食の研究○北遊漫錄○ダアヰンとマルクス○プレシコウスカヤ女史○ジンミー・ヒンギンス○正續「一年有半」○「平民主義」○「基督抹殺論」○「海外より見たる社會問題」○「帝國主義」○「工業衞生學」○神愁鬼哭○婦人と政治○秩序風俗の壞亂ラサールと吉田松陰○痛快至極○一片の耿々○風氣肅索たり……

■漢詩集（目次略す）……

■短言集（目次略す）……

見よ！ 階級人士の發狂的熱プン!!!

『解放群書』『書用傳宣』及月刊『放解』誌所行發 解放社 東京芝區新櫻田町十九番 振替東京三九六四四番

◎憎讀せよ〜本書を憎讀して幸德の眞價を知れ

解放群書（8）一故幸德傳次郎著 一四六判 二百頁 定價壹圓送料拾錢（半額宣傳版あり）

新重版

故秋水の私信祕文を集めて凡そ七十有餘通を得た。その文字の悲壯言々の肺肝に出ずるは改めて言ふを要せぬであらう。

〔一般內容〕

（一）明治三十八年巢鴨監獄より同志知友に宛てたもの……
（二）明治三十九年シアトル桑港等より故國に宛てたもの……
（三）明治四十三年より四十四年迄最後の獄中（東京監獄）から知友親戚特に母に宛てたもの……
（四）明治三十八年より四十三年間の書簡……
○夏草○小山久之助君を吊ふの記○兆民先生生序……
○附錄大石誠之助遺稿……

◇攻擊の材料にせんと本書の憎讀を初めたる某大家も母への手紙に至るや忽ち卷を投じ一書を飛して曰く『志士の決心同志の意識我れ之を堪へたり、孝子の心情烈母の決意に至りては我れ遂に之れを讀むに堪へず』と

◎德幸何者ぞ秋水何者ぞ彼れは只一個の傳次郎のみ

『解放群書』『書用傳宣』及月刊『放解』誌所行發 解放社 東京芝區新櫻田町十九番 振替東京三九六四四番

解放群書（定價壹圓送代拾錢）

△石川「世界社會運動史」
△岡氏「日本社會運動史」
△佐倉啄二「女工虐待史」
△山内氏「社會思想解説」
△英國勞働婦人運動史
▲守田「世界革命家列傳」
▲尾瀬氏「革命藝術大系」
△山崎地震憲兵火事巡査
△解放大家創作集上下二」
▲解放大家隨論集全二册
▲幸德全集上卷「名文集」
▲幸德全集中卷「書簡集」
▲中西氏「武左衛門一揆」
▲神近「未來を周る幻影」
▲小川末明「彼等甦らば」
▲新居格氏「月夜の喫烟」
▲山田清三郎「幽靈讀者」
▲青野季吉「解放の藝術」
▲近藤「露國革命運動史」
▲守田「ユートピア全集」
△婦人運動當面の諸問題
△有秋「世界革命文書集」
▲印には半額宣傳版あり

◇反動暴壓 内閣下の大驚異 幸德秋水全集の完成！

□解放群書（32）故幸德傳次郎著 四六判頁二百五十 定價壹圓 送代拾錢（半額宣傳版もあり）

最新刊

幸德秋水評論集

▼秋水幸德の思想評論に關しては今茲に贅するを要せず、又言ふ事を得ず又言はざるを可とす、只本社は苦心考案一字一句も伏字を使用せず、茲に彼れの思想と評論の全部を大集成し得たることを誇りとす

（内容一班）

○社會評論（十七篇）……
○社會主義論（六篇）……
○政治評論（六篇）……
○人物評論（五篇）……
○勞働問題（六篇）……
○政黨批判（六篇）……
○ブツクレヴヰユ（四篇）
○隨筆隨論（五篇）……

◇上卷 名文集 中卷 書簡集 下卷 評論集 定價各壹圓！

解放社 東京芝區新櫻田町十九 振替東京三六九四四番

「解放群書」「書用傳宣」及月刊「解放」發行所

◇本書を讀んで自然發生的の運動が如何に組織的であるかを知る

◇徒らに洛陽の紙價を騰からしめた「國と人民」「赭土に芽ぐむもの」「汝等の背後より」等々の名著にすら不滿を唱つた著者は、本書に於いて初めて會心の笑みを漏らしたといふ。

◇讀者は名著中の名著傑作中の傑作たる本書に於て初めて、愉絶快絶痛快淋漓にして眞に調べた藝術たる無産階級の藝術を見出すであらう。と同時に又本書に於て初めて、價格の點に於ても亦敢てブル的圓本に劣らざるプロ的圓本を見出すであらう。

解放群書（21）中西伊之助著 四六判三百頁全十五景 定價壹圓送料拾錢（半額版もあり）

武左衛門一揆

著者曰く

土百姓より起つて土百姓のために氣を吐き權力者階級のために殺戮された所謂義民に、佐倉宗吾、磔茂左衛門等々がある。だが、わが武左衛門!! 彼こそ眞に新時代農民運動の先驅者である！ 彼の行動には新しい革命精神——嵐のやうな熱い息吹きがある。彼は封建時代の時代精神より一歩も出ない所謂義民では確かにない！ 彼はただ封建時代に在つて近代農民運動を起したタツタ一人の先驅者である。私は數多き虫くつた義民の中から彼を發見し得たことを大なるほこりとし、此の衿持と新生の意氣とに驅られて新に本書を書下した。そして自身聊か近來にない會心の笑を漏らして居る。

◇武左衛門は佐倉宗吾よりも磔茂左衛門よりもズツト偉かつた！

解放社 東京芝區新櫻田町十九 振替東京三六九四四番

『解放群書』『書用傳宣』及月刊誌『解放』發行所

本書は重版又重版遂に絶版の『彼等甦らば』の宣傳用半額版である

宣傳用書(2)　小川未明著　四六版三百頁　定價半圓　送料拾錢

實に千載一遇の好機

眞に萬世一慶の歡喜

新版

小川未明傑作集

小川未明氏は、こゝに更めて說くまでもなく、明治大正昭和を通じて、最も特異な地位を占むべき作家である。文壇生活二十有餘年、その純眞にして玲瓏殊玉の如き魂は、今尙聊かの曇りを見せずに生きてゐる。而かも尙その魂や常に、時代と共に流動し發展し生長し進化してゐる。本書收むる處の十有七篇、皆これ最近氏の心情から自から流露した會心の快作、悉くこれ童兒の如き純情と革命家的熱情と東洋的詠嘆とが混淆し融和して一種不可思議な光芒を放つところの傑作雄篇。敢て眞の藝術を愛する人々の熱讀を希望する。

目次

新しい町の挿話
人と土地の話
死滅する村
老工夫と電燈
生物動搖
月の夜の記錄
女をめぐる疾風
娘と若者
石段に鐘聲
氷の國へつゞく路
小さい針の音
大雪
假面の町
雪解の流
彼等蘇生へらば
迷へる白い影
暴風と月の妖術

本書は大衆に強要されて生れた、絶版の復興版だから五百部限で終り！

『解放群書』『宣傳用書』及月刊誌『解放』發行所　解放社　東京芝區新櫻田町十九番　振替東京三六九四四番

◎本書內容は堂々たる露國革命運動史

宣傳用書(23)　近藤榮藏著　四六判三百頁　定價半圓　送料拾錢

◇著者は日本に於ける無產政黨の提唱者、曩に曉民共產黨事件の首魁として一年有半の言渡を受け保釋出獄中日本共產黨事件で起訴され、大正十二年六月五日曉の手入前風を喰つて入露亡命、專ら革命運動を研究。滿四年の蘊蓄が傾倒して此の一卷九章約三百頁となる。

露國革命運動史

內容一般

◇第一章一月九日……
▲嵐近づく……
▲怪僧現はる……
▲勞働者起つ……
▲請願文成る……
▲宮城前に集まる……
▲無慘な射擊……
◇第二章一月から十月まで
▲全露の勞動者憤る……
▲政府妥協を望む……
▲勞動者尙ほ戰ふ……
▲勞動者の鬪爭ぶり……
▲罷業暴動化す……
▲遂にまた騷ぐ……
▲政府復讐す……
◇第三章勞働者代表會議
▲代表會議生る……
▲會議の性質分らず……
▲ウイッテ乘出ます……
▲八時間勞働制で躓く……
◇第四章十二月の勞動者蹶起……
▲政府機先を制す……
▲モフクヴテ暴動化す……
▲各地とも勞動者慘敗す……
◇第五章反動期の勞働運動……
▲資本家奧の手で攻める……
▲街頭から議會へ……
▲暗黑時代來る……
◇第六章勞働階級の再起……
▲レンスク事件……
▲運動多方面に亘る……
▲罷業が邪魔す……
▲形勢再轉す……
◇第七章二月革命と勞働者……
▲組織間に合はず……
▲勞働者兵士に近寄る……
▲軍隊叛く……
◇第八章二月から十月革命へ……
▲二重政權現はる……
▲ヴオルシエヴイキ勝つ……
◇附錄……
▲ロシアに於ける資本主義の發達……
▲ロンアに於けるプロレタリアの發生……
▲ロシアに於ける組合運動……

『解放群書』『宣傳用書』及月刊誌『解放』發行所　解放社　東京芝區新櫻田町十九番　振替東京三六九四四番

◎關係革命家の手に成る露國革命運動史

解放群書（18）佐倉琢二著

女工虐待史

定價壹圓・送代拾錢

◆故細井和喜藏氏の名著『女工哀史』を世に紹介した藤森成吉氏は本書に序して曰く、聞きしに勝る巧妙の搾取、戰慄の暴虐、哀史以上の虐待史今や細井君の遺志は全く完成されたり、と。

◆著者は製糸國信州の山繭から生れて蠶蛹で育つた一介の勞働者、骨肉が燒嶽と共に爆發し、血涙が淺間と共に噴火し、自覺が反抗して製絲女工五十萬の爲に絶叫するのだ。

◆曝露以上の曝露、研究以上の研究、讀者は眼前に展開する『巧妙の搾取戰慄の暴虐哀史以上の虐待史』を卷を措くの暇なく只切齒握汗、一氣に讀破するの止むなきに至るであらふ。

内容

一般

◇製糸業の産業的地位
◇工場企業形態と經營
◇女工募集の表裏と
◇工場の構造と設備
◇繰業と罰金制度

◇工場の賃銀支給方法
◇工場の衛生狀態と企業
◇職工の勞働狀態と風儀
◇工場の經濟狀態と生糸貿易
◇其他規約、統計表、圖面

東京芝區新櫻田町十九 解放及解放群書發行所 解放社 振替東京三六九四四番 電話銀座二〇七七番

日本社會運動史も數多いが本書の如く累版又累版のものが他にあるか？

講談と銘打つてあるが素より凡百講談ではない著者は賴山陽の『日本外史』を向ふに廻すつもりで書いたと言つてゐるが、立派な社會運動正史であり、警拔なる運動史論である。筆を明治維新に起し昭和二年に終つて居り波瀾重疊の事件と人物が文章の中でビクビク動いてゐる。この點で本書は妙個の大衆文藝社會講談と評されるであらう。

名文家の講談好の河上博士と田中大將とは本書を讀んで嗟歎久ふして何と云ふか？

解放群書（17）岡陽之助著

講談日本社會運動史

四六判二百五十頁 定價壹圓 送代拾錢

内容目次

◇第一篇搖藍時代……第一章明治維新と自由思想　第二章自由民權の運動と東洋社會黨第三章自由黨と國會開設……
◇第二篇發展時代……第一章社會主義思想と初期の勞働運動　第二章勞働運動の成長第三章社會民主黨の誕生……
◇第三篇活躍時代……第一章平民社時代（その一）　第二章平民社時代（その二）第三章平民社時代（その三）……
◇第四篇鬪爭時代……第一章雌伏時代　第二章社會主義の流行と米騷動　第三章勞動運動の勃興　第四章日本社會主義同盟及び平民大學……
◇第五篇反動時代……第一章アナボルの分裂と共産黨事件　第二章右傾全盛時代第三章思想團體の全滅……
◇第六篇分裂時代……第一章總同盟の分裂　第二章農民勞働黨　第三章最左翼の活動　第四章無産階級政治戰線の分裂　第五章天下三分時代　第六章結論……

『解放群書』『宣傳用書』及月刊誌『解放』發行所 解放社 東京芝區新櫻田町十九 振替東京三六九四四番

◎東京日日のユートピア懸賞論文入賞者は果して何を參考としたか？

◆色々の團體や個人が幾度か本全集を企て其都度中止中絶の止むなきに至つた難事業を、著者の刻苦勉勵篤學眞摯が今や之れを完成した。事頗る小なりと雖も効寔に大なりと云はざるを得まい。

ユートピア全集

解放群書（16）守田有秋著

四六判 三百頁

定價壹圓送料拾錢（半額版もある）

内容目次

第一編 思想編 ○世界各國民のユートピヤ思想○希臘人の思想○猶太人の思想○印度人の思想○支那人の思想○日本人の思想○社會主義の理想社會……

第二編 古代及中世のユートピヤ ○プラトオの共和國○プルタアクのライカルガン○モーアのユートピア○ハアリントンのオセアニア聯邦○カンパネラの大陽の都……

第三編 近世のユートピヤ（上） ○オーウエンの新道德世界○ベラミーの百年後○カアペーのイカリヤ航海記○モリスの理想鄕○ヘルツカの自由國○シンクレアの産業共和國……

第四編 近世のユートピヤ（下） ○ウエルズの新ユートピア○ウトオル・フランスのペンギユキン島○アナトル・フランスの白い石○ボタダノフの赤い星……

第五編 日本のユートピヤ ○馬琴の夢想兵衞胡蝶物語○游谷子の和莊兵衞○失野龍溪の新社會……

第六編 ユートピヤ比較編 ○ユートピアに於ける諸問題○ユートピアに於ける男女關係○ユートピヤ進化（結論）……

『解放群書』『宣傳用書』及月刊誌『解放』發行所

解放社

東京芝區新櫻田町十九番

振替東京三六九四四

◎現今では遺憾ながら本書が果して日本唯一簡全のユートピア全集であるか？

禁安 1
43

◇定價壹圓（送代拾錢）
◇昭和四年三月二十日　印刷納本
◇仝　年四月五日　發行發賣
◇發行編輯印刷の所及人
◇東京市芝區新橋田町十九番地
◇解放社　山崎今朝彌